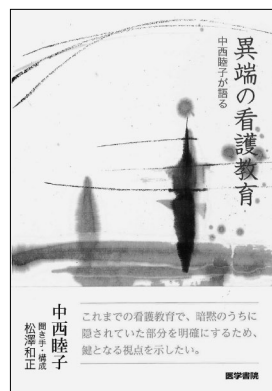


『異端の看護教育 中西睦子が語る』

著者想定のかみ組みさえ超越する者に向けた“遺言書”

著：中西睦子／聞き手・構成：松澤和正

定価：本体 2,200 円＋税／発行：医学書院／TEL：03-3817-5657



書名が示している通り、本書は「看護教育」を担う者、人を育てる立場にある者に向けて編まれている。だからこそ、随所で「問題意識をもつ人をどう育てるか」が問われる。本書においては、その育て方、それを語った著者が「異端」とされる。たとえば、「生意気な」「わがままなナースを育てなさい」「ナースをダメにしたのは看護教育である」等々。本書で著者の聞き手であった——著者の言葉を生み出す媒体の役割を担った——松澤和正氏が形容した「鋭利」かつ「シニカルで独我的」という表現が、見事にこれを言い当てている。

しかし、こうした類の表現に幾度も出会ううちに、それは「異端」というよりも、ある種の心地よさを感じさせる表現に変わってしまう。読み手である自身も知らぬ間に、異端とも言える態度をもって世界にかかわろうとしているためだ。本書が「感染」と言っている事態に読者がまんまと陥り、「これでまた一人中西流に感染した」と言って、著者が含み笑いをしているのが目に浮かぶ。この感染者として「学生」を挙げていることから、本書は、著者流の態度に感染させられる可能性を孕んだ読み手に、育ちつつある者をも想定して編まれている。著者においては、教育する者とされる者とは、二項対立していないのであろう。

「中西流」の教育が重視するのは、箱詰め教育に比して「もう少し自由度をもたせたゆるやかな方

針」である。教養への言及から始まる本書は、それを「バランス感覚」「おもしろがること」「好奇心」「ねばり強さ」「知的なたくましさ」と言って、「ノウハウ」「義務感」に配置する。しかし読み手が、著者が期待するような人になることを必ずしも望んではない。「患者の側がナース（看護）に適應するんですよ」と、ナースが患者の側に合わせるというコモンセンスをいとも簡単にひっくり返して「既成のかみにはまらずに自由に考える」ことを求める態度からは、著者の価値観に迎合することをも求められていないことが透かし見える。著者に従ったら、著者を裏切ることになる。むしろ、著者のかみ組みさえも超越して、「孤高を保ち」つつ「自由に」「学問的に遊ぶ」こと、そこから、例えば著者が構想しつつあった「社会看護学」という、これまでの看護のかみ組みをはるかに越えたスケールの発想が生まれてくることが待たれるのである。

対話相手の松澤氏によって、本書は著者の遺言だとも記されていた。看護職が陥っている制度の構造を「敵」と見なし、社会から批判を受けることに価値を置き、なによりも事実をしっかりと見極めること。本書を通して、この態度をこそ深く心に刻みつけたいと思った。そして、中西流の感染者の1人として、ラディカルに生きたい、そんな気持ちにさせられた。